

席田青木遺跡6

—第6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書933集

2007

福岡市教育委員会

席田青木遺跡6

—第6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書933集



遺跡番号 MAK-6
調査番号 0527

2007

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。その中でも博多区は大陸との交流の中で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくことは行政に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い記録の保存につとめています。

今回報告する席田青木遺跡発掘調査報告書は共同住宅建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代と中世の集落跡を確認いたしました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2007年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　言

□本報告書は博多区青木1丁目438番、438番2の共同住宅建設に伴って2005年6月15日から7月14日にかけて発掘調査を行った席田青木遺跡第6次調査の調査報告書である。
□本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
□遺構実測の作成と写真撮影は屋山が、遺物実測は平川敬治が行った。
□本書で用いた方位は磁北で真北より6°21'西偏する。
□遺構・遺物番号はそれぞれ通し番号とした。
□本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
□貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一（2000年）太宰府市教育委員会を参照した。
□遺物番号056の蛍光X線分析は福岡市立埋蔵文化財センターで行った。

遺跡調査番号	0527	遺跡番号	MAK-6	分布地図番号	上白井 22
調査地地番	福岡市博多区青木1丁目438番、438番2				
開発面積	197m ²	調査面積	197m ²	調査原因	共同住宅建設
調査期間	2005年6月15日～7月14日		担当者	屋山 洋	

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
3	遺跡の立地と環境	1
II	調査の記録	1
1	調査の概要	1
2	遺構と遺物	4
1.	弥生時代の遺構と遺物	4
2.	古代末～中世の遺構と遺物	14
3	小 結	15

挿図目次

第1図	遺跡群の位置 (1/25,000)	2
第2図	調査地点位置図 (1/4,000)	3
第3図	調査区周辺図 (1/400)	4
第4図	調査区全体図 (1/80)	5
第5図	SK004遺構実測図 (1/30)	6
第6図	SK004遺物実測図1 (1/3)	7
第7図	SK004遺物実測図2 (1/3)	8
第8図	SK004遺物実測図3 (1/3)	9
第9図	SK004遺物実測図4 (1/3)	10
第10図	SK004遺物実測図5 (1/2)	11
第11図	SK040遺構遺物実測図 (1/10・1/3)	12
第12図	SK034遺構実測図 (1/40)	13
第13図	古代中世遺構出土遺物実測図 (1/3)	14

図版目次

図版 1	1. 調査区全景 (南東から)	2. SK040 (北西から)
図版 2	1. SK004 (南東から)	2. SK004土層 (北西から)
図版 3	1. SD046 (南から)	2. SK034 (南から)

I. はじめに

1 調査に至る経過

2005年4月11日付で古賀ミサ子氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に福岡市博多区席田青木1丁目438番、438番2の共同住宅建築に伴う埋蔵文化財事前調査申請書(17-2-30)が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である席田青木遺跡群内に位置しており、周辺の調査でも遺跡が確認されているため申請地においても遺構の存在が予想された。そのため試掘調査による確認が必要であると判断し、5月6日に車機を使用して試掘調査を行ったところ現地表面から50~80cmの深さで花崗岩風化岩盤に達し、その深さで遺構を確認した。その結果と建物の基礎設計を照らし合わせたところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が避けられないため、建築に先立ち発掘調査を行い記録保存を測ることで両者の協議が成立した。以上の協議をうけて2005年6月から発掘調査を行うこととなり、実際には6月15日より7月14日までの期間で満喫を行った。

2 調査の組織

(2005年調査時)		2006年整理時	
調査主体	教育委員会埋蔵文化財課	教育委員会埋蔵文化財1課	
埋蔵文化財課課長	山口謙治	埋蔵文化財1課課長	山口謙治
埋蔵文化財課第1係長	池崎謙二	調査係長	山崎龍男
調査庶務	鈴木由喜	調査庶務	鈴木由喜
調査担当	埋蔵文化財課第1係 屋山洋	埋蔵文化財1課調査係	屋山洋
作業員	中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ 藤野幾志 宮崎幸子 乗野孝子 中島道夫		
整理作業	大石加代子 席田慧 黒早苗 藤野洋子		

3 遺跡の立地と環境

席田青木遺跡は福岡平野東端を東南から北西に向かって延びる月隈丘陵の北端部に位置する。月隈丘陵は四毛寺山に端を発し、福岡平野の東縁を画しながら博多湾に向かって延びており、丘陵東西の両斜面は解析を多く受けた地形で、多くの丘陵と谷部が入り組んだ状態を呈している。席田青木遺跡は北東から南西に向かって延びる舌状の丘陵上と丘陵南北両側の谷部を含んでおり、これまでの発掘調査で甕棺墓地、弥生時代集落や、古代集落、近世～近代墓が検出されている。

II. 調査の記録

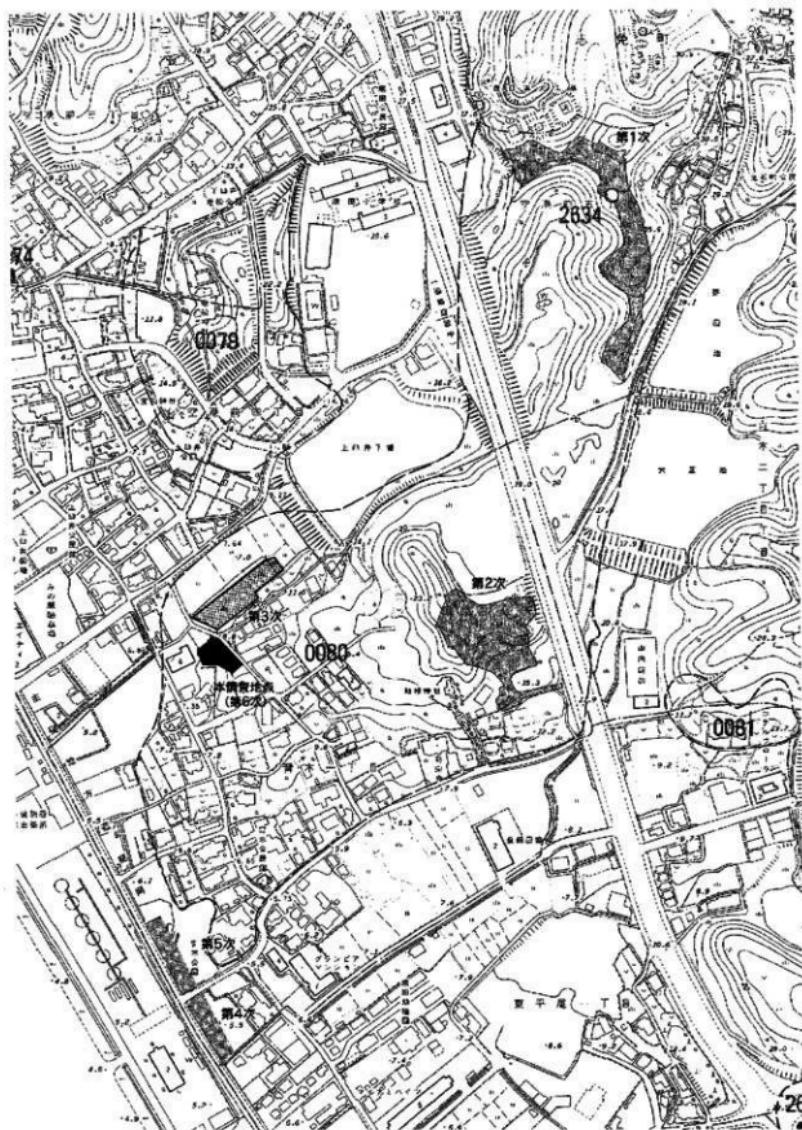
1 調査の概要

当初道路側に面した塙を調査前に申請者側で撤去する予定であったが、調査開始時点では塙が残っていたため大型重機が使えず、また、調査区西側に段落ちがあり予想した以上の廃土がでたことから、一度に全面の調査を行うことができなかったため、調査区東側部分に関しては西側の調査が終了した後に重機を入れ、打って返しをしてから調査を行った。今回の6次調査地点の調査区は西に向かって緩やかに傾斜している。また西隣と北隣の敷地は現在1m以上低く、本調査区は舌状台地の先端に位置する。調査では弥生時代の貯蔵穴、柱穴状遺構と古代末から中世の土坑、溝、柱穴状遺構を確認した。貯蔵穴は径2.5mを測る。遺物は床面上から後期中頃の袋口縁壺などが出土した。弥生終末には完形の小型甕を埋めた穴(SK040)があり、柱を抜いた後の祭祀の可能性などが考えられる。古代末から中世の溝は4条確認したがいずれも残りは悪い。SD002は方位を意識した可能性があり、流水の痕跡もみられないため区画溝である可能性が高いと考えられる。土坑は長径2.3m、短径1.2mを

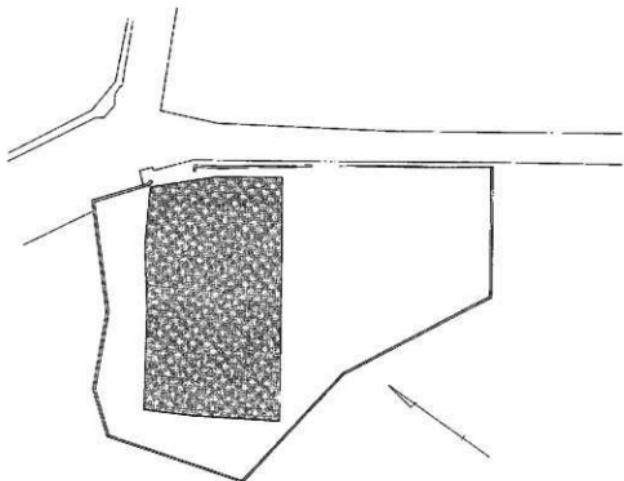


1 中山遺跡	9 赤徳ノ浦遺跡	17 下月限C遺跡	25 影ヶ浦古墳群	33 麻野遺跡
2 上臼井遺跡	10 宜満尾遺跡	18 上月限B遺跡	26 挟田ヶ浦古墳群	34 井相田A遺跡
3 席田古木遺跡	11 丸尾古墳	19 立花寺B遺跡	27 雀居遺跡	35 比恵遺跡
4 丸尾遺跡	12 宝満尾東遺跡	20 立花寺遺跡	28 那珂君休遺跡	36 那珂遺跡
5 新立森古墳群	13 下月限天神森遺跡	21 熊野古墳群	29 板付遺跡	37 五十川高木遺跡
6 貝花遺跡・貝花地古墳群	14 下月限A遺跡	22 金剛川古墳群	30 駒川遺跡	38 井尻遺跡
7 大谷遺跡	15 下月限B遺跡	23 金隈遺跡	31 仲島遺跡	
8 久保園遺跡	16 上月限遺跡	24 影ヶ前遺跡	32 井相田C遺跡	

第1図 遺跡群の位置 (1/25,000)



第2図 調査地点位置図 (1/4,000)



第3図 調査区周辺図 (1/400)

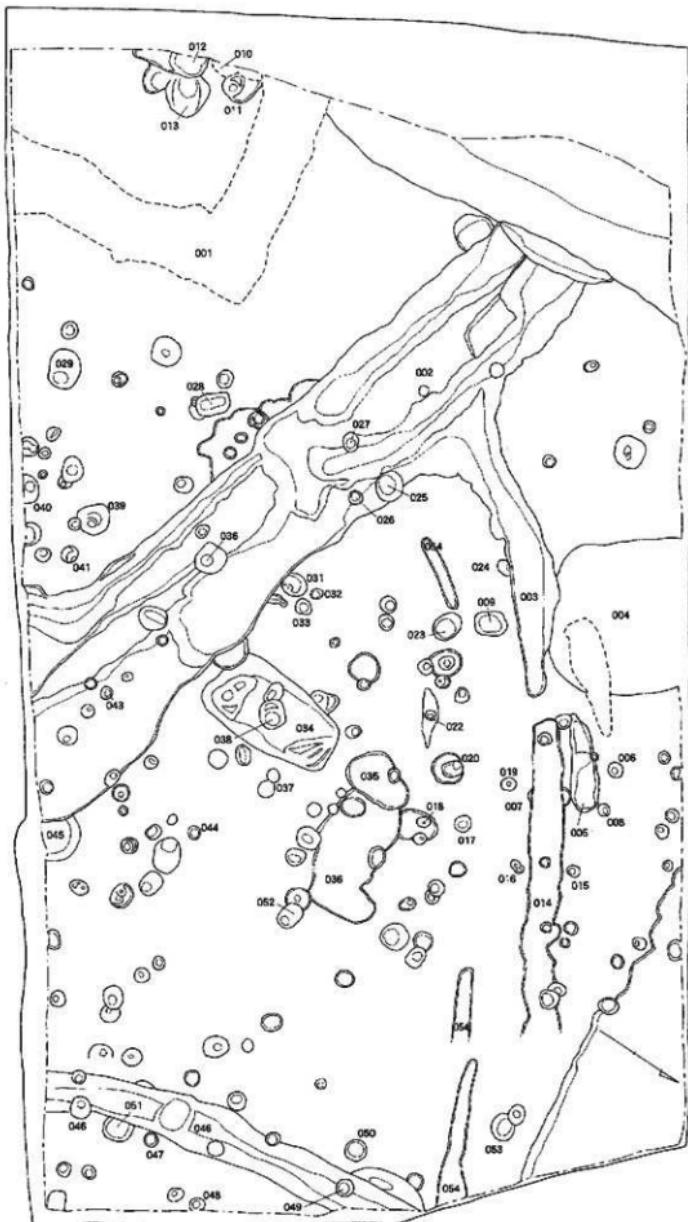
測る。溝と土坑からは白磁の小片が出土した。隣接する3次調査では弥生時代終末の堅穴式住居や井戸が確認されているが、本調査地点ではそれらの遺構は確認できなかった。理由として3次調査が谷部に位置するのに対し、本調査地点は丘陵上に位置するなど立地条件が異なることが考えられる。

2 遺構と遺物

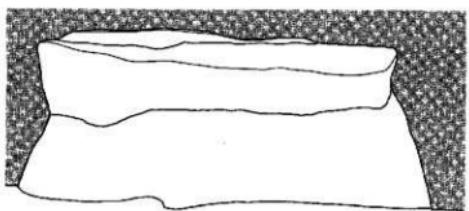
1. 弥生時代の遺構と遺物

1) 貯蔵穴 1基確認した。遺構検出面からの深さは1.1mを測る。弥生時代中期の遺物は貯蔵穴の覆土から多く出土しているが、遺構を確認できないのは貯蔵穴が埋没する時期に造成が行われ、遺構が削平された可能性が考えられる。貯蔵穴もその時に削平をうけたものと思われる。

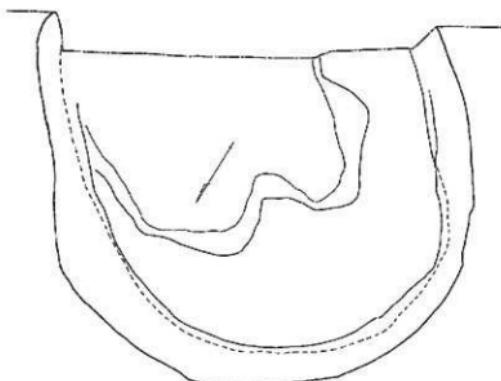
SK004（第5図）調査区の北辺中央で検出した。SD003に切られる。遺構の北西部は調査区外に延びる。検出面での平面は円形を呈し径2.5m、深さ1.1mを測る。壁は床から50cm上までは内傾し、その後は緩く開きながら立ち上がる。外側に開くのは壁が崩落したためであり、元々の断面はフラスコ状であった可能性がある。床面は西側が10cm前後低い。覆土は全体的にレンズ状に堆積する。床面近くでは白色粘土層と黒褐色や暗茶褐色土の層が重なり合っており、壁の崩落と土壤化を繰り返したものと思われる。また、埋没中もしくは埋没後に一度掘り返された（2～7層）可能性がある。遺物は弥生時代の中期中葉から後期にかけての遺物が多く出土しているが、特に床面直上で弥生時代後期中頃に属する袋口縁壺の破片が出土しており、埋没の時期は後期中葉まで降るものと思われる。また鉄型の可能性がある土器片が1点出土した。出土遺物（第6～10図 001～056）。001～010はトレンチから出土した遺物で上層から下層までが混じる。001～003は壺で口縁は「く」の字型に立ち上がる。001は口縁は緩く外反しくびれ部に突帯がつく。復元口径は37cm。調整は内外面ともハケか。砂を多



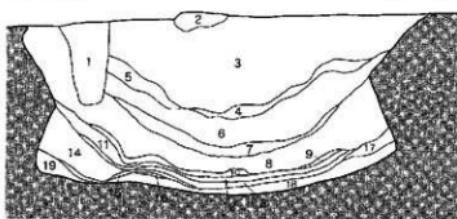
第4図 調査区全体図 (1/80)



m9C 6=4

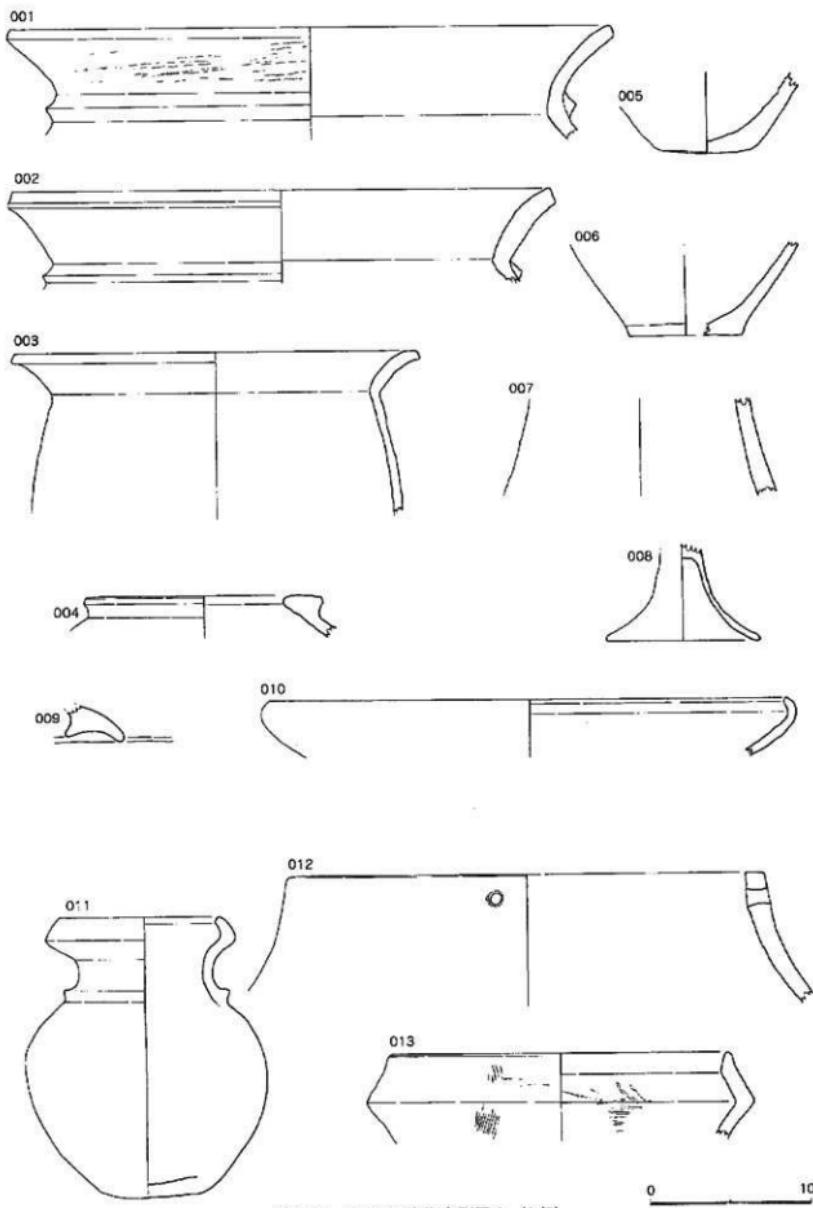


H=8.90m

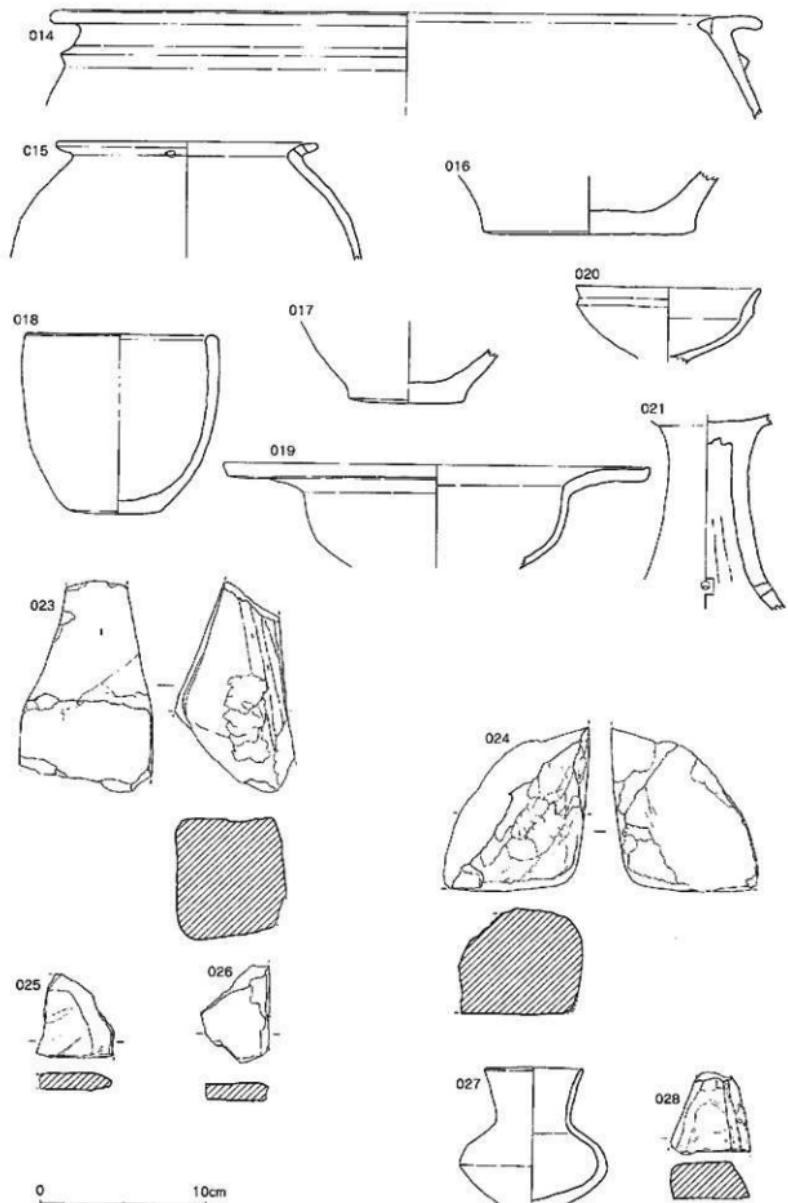


1. 塗灰褐色土 1mほどどの白色砂を多く含む
2. 塗灰褐色土
3. 塗褐色土
4. 塗褐色土 増山土、便道帶土
5. 塗褐色土 灰褐色土
6. 塗褐色土 土細小片と白色砂を多く含む
7. 灰白色土
8. 灰褐色土 灰色土質を多く含む
9. 灰褐色土 白色砂を多く含む
10. 灰褐色土
11. 塗褐色土 花崗岩ハイランジ土を主とし灰褐色が變じる
12. 塗灰褐色土
13. 灰白色土
14. 灰褐色土
15. 塗褐色粘土質土
16. 白色粘土
17. 塗褐色土 | 膜片、炭化物片多く含む
18. 黑褐色土 | 下部の断面
19. 黄褐色土

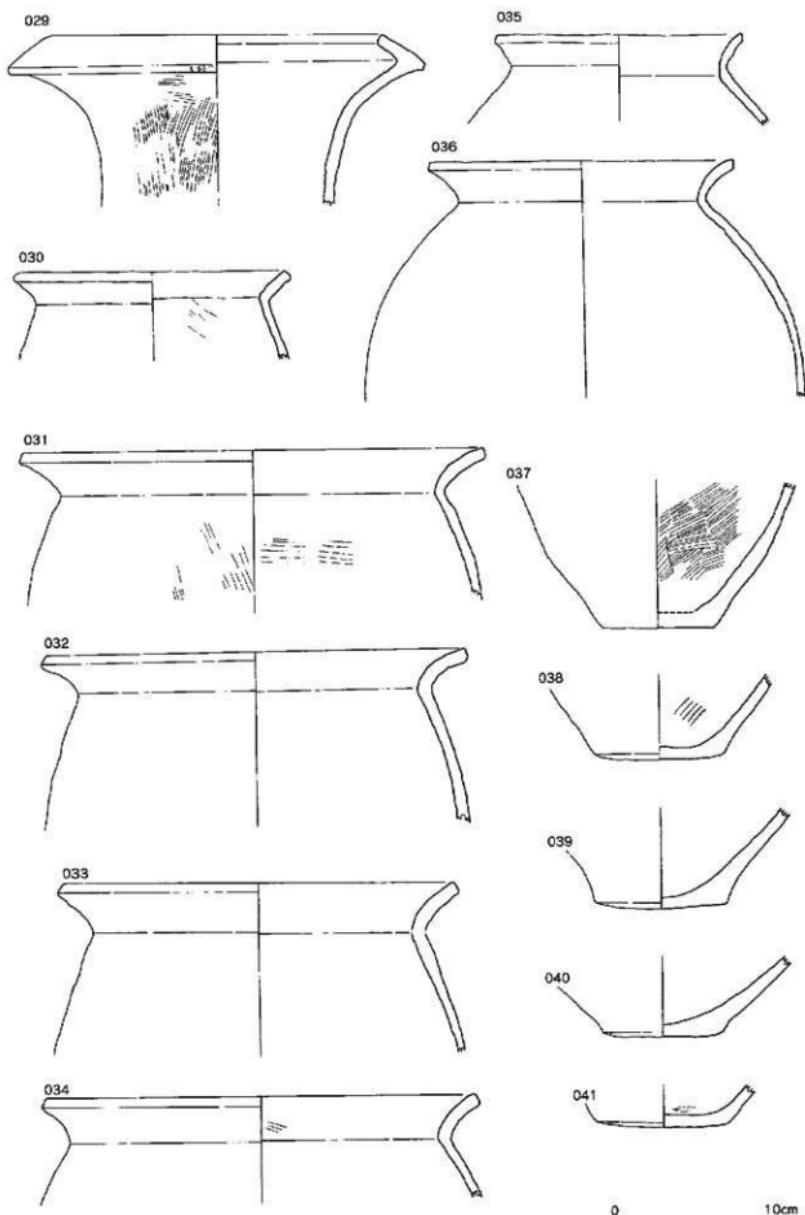
第5図 SK004造構実測図 (1/30)



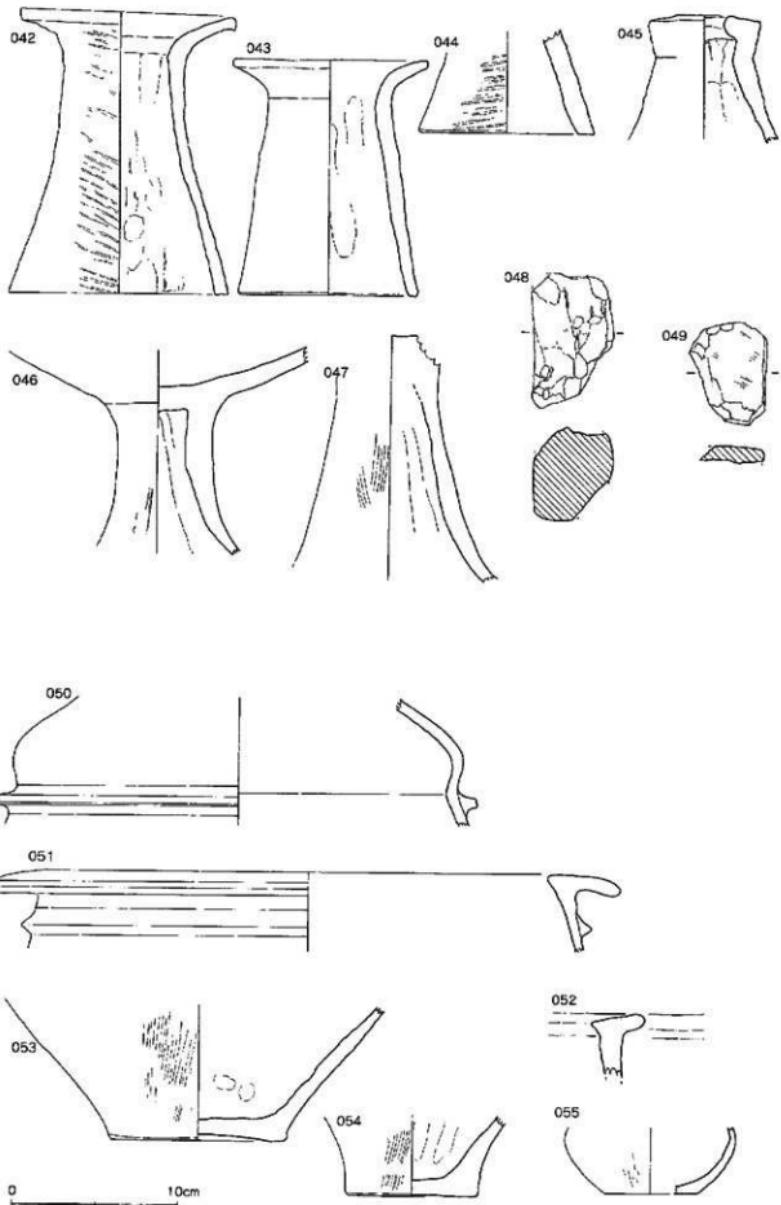
第6図 SK004遺物実測図1 (1/3)



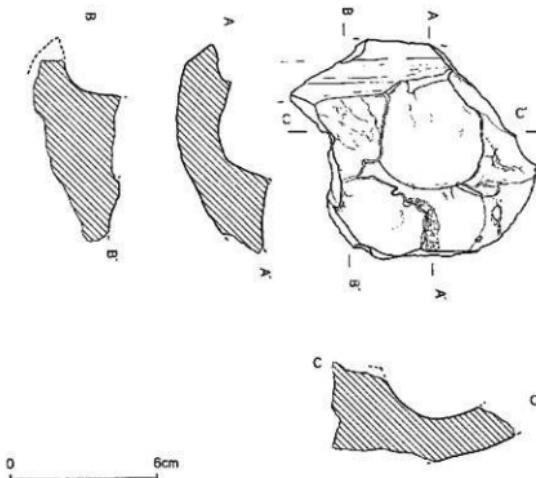
第7図 SK004遺物実測図2 (1/3)



第8図 SK004遺物実測図3 (1/3)

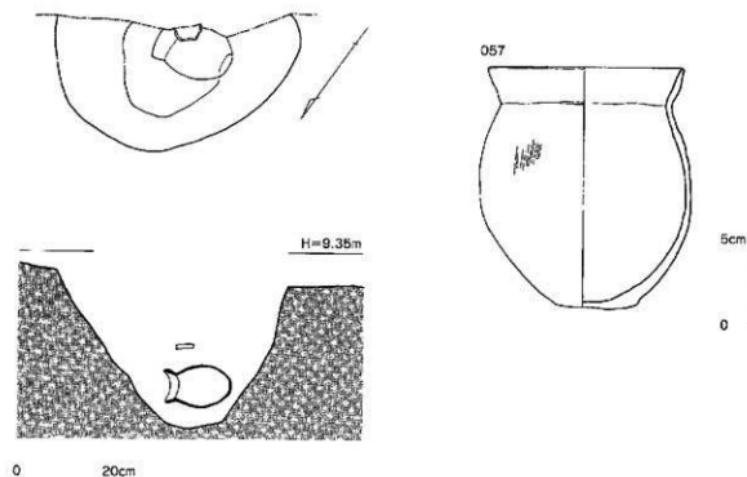


第9図 SK004遺物実測図4 (1/3)



第10図 SK004遺物実測図5 (1/2)

く含む。002は口縁やや厚く外反する。口縁端は角張る。復元口径は34cm。調整は不明。砂多く含む。003の口縁は強く外反する。復元口径は25cm。明褐色を呈し砂を多く含む。調整不明。004は蓋の口縁。復元口径14.6cm、口縁はL字口縁で脇部は塊状を呈す。調整不明。砂を少暈含む。005・006は蓋底部である。005は底径が5.5cmと狭くやや丸みを帯びる。006は推定底径7cmを測る。調整不明。砂を多く含む。007は筒型器台脚部か。下端は遺存していないが、現在遺存している部分の復元径は17cmと大きい。表面遺存懶く、丹塗りは剥落して橙色を呈す。胎土精良で砂は少量しか含まない。008は高坏脚部である。復元底部径は9.6cmを測る。調整不明。にぶい黄橙色を呈し胎土は砂を多く含む。焼成良好。009は蓋の受け部か。内外面橙色で胎土精良。調整不明。010は高坏の坏口縁か。復元口径31.8cmを測る。調整不明。橙色を呈し胎土は砂を多く含む。011～026は上層から出土した。011は蓋の完形品である。口径9.4cm、器高17.1cmを測る。調整は不明で赤橙色を呈す。1cmほどの白色砂を多く含む。012は丹塗り無頸蓋の口縁である。口縁端から1cm離れて径8cmほどの穿孔がある。013は二重口縁蓋で復元口径20.8cmを測る。明褐色で砂を多く含む。014は蓋口縁で復元口径43.4cmを測る。にぶい橙色で砂を多く含む。蓋柏か。015は蓋である。復元口径16cmを測る。赤色顔料がわずかに残る。胎土精良で砂と雲母片含む。口縁に穿孔有り。016・017は蓋底部である。016は底径13.1cmを測る。灰褐色で胎土は砂と雲母片を含む。蓋柏か。017は底部形7.1cmを測る。底面がややレンズ状を呈す。色調は灰白色で胎土は白色砂を多く含む。018は蓋である。口径11.8cm、器高11cmを測る。外面灰白色で黒斑有り。胎土は白色砂を多く含む。焼成良好。019は鉢で復元口径26.2cmを測る。褐灰色を呈し胎土は白色砂を多く含む。020は高坏の坏部である。口径11.4cmを測り、外面黄灰色を呈す。白色砂を多く含み焼成良好。021は高坏脚部である。橙色を呈し白色砂を多く含む。下端に円形の穿孔有り。023は砥石である。砂岩製で両端を欠損。重さ655.44gを測る。遺存している4面を砥石として使用。024は砥石片か。砂岩製で1面が平らで他の面は丸みを帯びる。



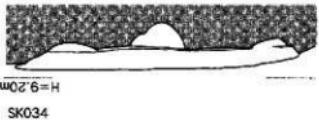
第11図 SK040 遺構遺物実測図 (1/10・1/3)

重さ 723.8g を測る。025は砥石である。砂岩製で厚さ 1cm、重さ 31.47 g を測る。026は砥石である。砂岩製で厚さ 1.1 cm、残存重 35.8g を測る。027・028は中層から出土した。027は壺で復元口径 6 cm、器高 13.5 cm を測る。胴部はやや扁平で口縁はゆるく外反する。外面はにぶい黄橙色を呈し白色砂を多く含む。内面胴部に指オサエを施す。焼成良好。028は頁岩製と思われる砥石で 2 面を砥石として使用している。残存重 76.23g を測る。029から 056は下層出土遺物である。029は袋状口縁壺で口径 20.2 cm を測る。にぶい黄橙色を呈し白色砂を多く含む。調整は外面縦方向の刷毛を施す。口縁端に刻みあり。030～035は甕である。030は復元口径 16.8 cm を測る。外面灰白色を呈し白色砂を多く含む。内面胴部にケズリを施す。口縁の立ち上がりは直線的でわずかに外反する。031は復元口径 28.4 cm を測る。外面はにぶい黄橙色で白色砂を多く含む他、茶褐色の粒を含む。調整は胴部が内外面ハケ、口縁はナデか。032は復元口径 25 cm を測る。外面明褐色を呈し白色砂を多く含む。調整不明。033は復元口径 24.4 cm を測る。外面灰白色を呈し白色砂を多く含む。調整不明。034は床面直上で出土した。復元口径 26.6 cm を測る。外面褐灰色を呈し白色砂を多く含む。遺存不良で調整は不明瞭だが内面口縁部にハケの痕跡が残る。035は復元口径 15.2 cm を測る。外面は黄灰色を呈し白色砂を多く含む。調整不明。036は壺で復元口径 18.6 cm を測る。外面は暗灰色を呈すが一部に丹が残る。外面は磨滅のため不明で、内面は指オサエの後横方向にハケを施す。037から 041は壺及び甕の底部である。037は復元底径 6.6 cm を測る。褐灰色を呈し白色砂を多く含む。調整は外面が不明、内面は横方向にハケを施す。038は底部径 8 cm を測る。外面は灰白色から暗灰色を呈し黒斑あり。胎土に白色砂を多く含む。調整は内面にハケを施す。039は底部径 8 cm を測る。灰白色を呈し白色砂を多く含む。調整は不明。底部はレンズ状に膨らむ。040は底部径 7.5 cm を測る。淡黄橙色を呈し胎土に白色砂を多く含む。底部がレンズ状に膨らむ。041は底部径 8 cm を測る。灰白色を呈し胎土に白

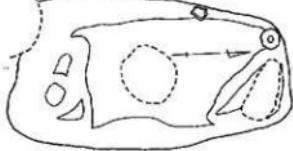
色砂を多く含む。調整は内面に横方向のナデを施す。底部はレンズ状に膨らむ。042～045は器台である。042は底径13.3cm、器高17.4cmを測る。にぶい黄橙色を呈し胎土に白色砂を多く含む。調整は外面向斜め方向のタタキで、内面は指オササ後縦方向のナデで口縁附近にはナデを施す。括れ部を中心絞りの痕跡が残る。043は復元口径12cm、底径10.9cm、器高14.4cmを測る。灰白色を呈し胎土に白色砂を多く含む。調整は不明瞭であるが外面には一部に指オササが見られる。044は底部径10.8cmを測る。灰白色を呈し胎土に白色砂を多く含む。外面に斜めのタタキを施す。045は復元上部径6.8cmを測る。外面は剥落しており灰白色を呈し、胎土には白色砂を多く含む。調整は内面に指オササを施す。046と047は高杯である。046は白色を呈し胎土には白色砂を多く含む。残りが悪く坏部の調整は不明であるが脚部外面は縦方向のハケ、脚部内面は絞り痕がそのまま残っており未調整である。048は不明土製品である。厚さ約6cmの磚のような形と思われる。外面は灰白色で一部薄い橙色を呈す。胎土は砂を多量に含むとともに植物の茎を含み、外面は軽く押さえて整形して終わっている。土製の鉄型などの可能性がある。049は蛇紋岩で薄く刻離している。表面を磨いている。砥石として使用か。050は瓢形土器である。表面の遺存悪いが一部丹が残る。胎土精良。051・052は甕である。051は復元口径38cmを測る。にぶい橙色を呈し胎土に白色砂と雲母を多く含む。口縁下に断面三角の突帯が付く。052は口縁端部のみである。明褐色を呈し胎土は砂を多く含む。053・054は底部である。053は復元底径10.8cmを測る。外面はにぶい橙色を呈し胎土は砂と雲母片を多く含む。調整は外面が縦方向のハケ、内面は指オササである。054は底部径8.1cmを測る。にぶい黄橙色を呈し胎土に白色砂を多く含む。055は鉢か。復元底部径5.4cmを測る。外面灰白色を呈し調整は外面ヘラナデを施す。056は土製品である。表面は剥落が多く遺存状態は不良である。外面は白色で断面は黒色を呈す。粘土の粒子は細かいが1～3mmの白色砂を多く含み気泡状の細かな孔が多く見られる。焼成はやや軟質である。左端に溝状の凹みがあり、中央にはそれから続く半球状の凹みが見られる。外側はゆるいカーブを描く半円状で全体が丸瓦に似る。用途不明であるが鉄型の可能性が考えられる。外側がゆるく弧を描くことから近畿地方で見られるような外枠につけるものか。ちなみに表面の鉄型部分と思われる場所を蛍光X線分析にかけたが銅などの成分は検出されなかった。

2) 土坑

SK040(第11図) 調査区南端部中央で検出した。遺構の1/3が調査区外に延び、現状で径50cm、深さ34cmを測る。底面から4cm浮いた状態で完形の甕が1点横向きの状態で出土した。柱穴とすれば建物廃絶時に柱を抜いた際の祭祀か。弥生時代後期後半と考えられる。川土遺物(第11図057)。057は甕である。口径12cm、器高14.8cmを測る。表面の風化が著しい。表面はにぶい橙色を呈し口縁から底部まで続く大きな黒斑がある。調整は摩滅しているが外面が縦ハケ、内面には横ハケを施す。胎土はやや粗めで1～2mmほどの白色砂を多量に含む。底部は径4.7cmと小さい。焼成は良好。



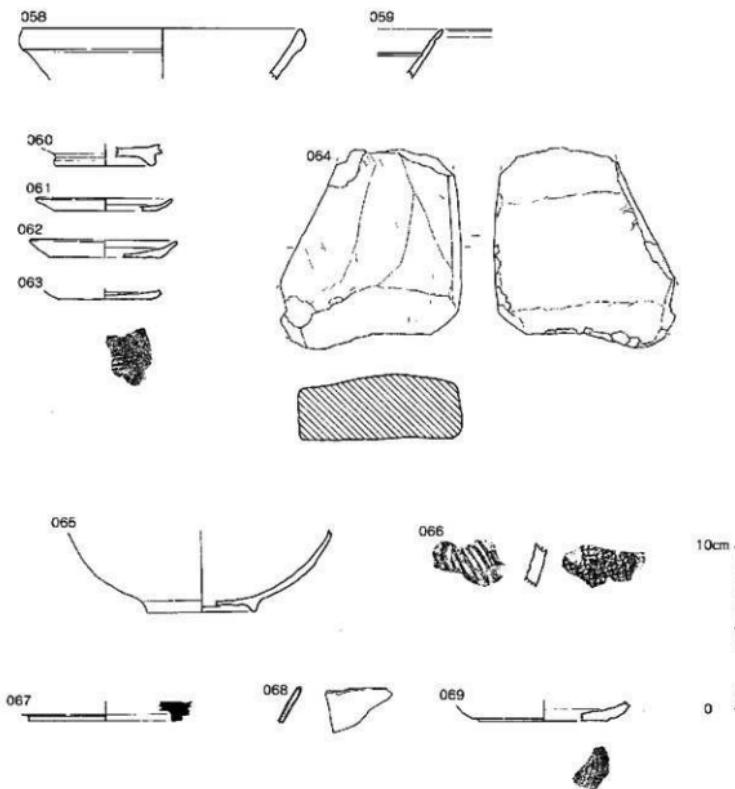
SK034



0 60cm

SK034土壇
1. 黄褐色土
2. 黄褐色土
3. 黄褐色土
黄褐色土を粒状に多く含む
灰色土を含む SK034より古い柱穴状遺構

第12図 SK034 遺構実測図 (1/40)



第13図 古代中世遺構出土遺物実測図 (1/3)

2. 古代末～中世の遺構と遺物

1) 土坑

SK034 (第12図) 調査区の中央部に位置する。平面は長方形、断面逆台形を呈す。主軸をN-3°-Eにとり長径223cm、幅125cm、深さ18cmを測る。両端部に5~8cmの掘り込みを持つ。中央の柱穴状遺構は034より古い遺構である。出土遺物 (第13図058~064)。058は白磁碗IV類である。復元口径17.4cmを測る。胎は灰白色を呈し、胎土は精良で黒色微小粒子を含む。059は白磁碗である。V類か。灰白色を呈す。060は瓦器碗底部である。表面は暗灰色を呈す。調整は遺存している部分全体に横ナデがみられる。061~063は土師皿である。061は復元口径8.2cm、器高8mmを測る。にぶい橙色を呈し胎土に微小な白色砂と雲母片を少量含む。調整と切り離しは不明である。062は復元口径8.9cm、器高1.0cmを測る。外面橙白色を呈し胎土は精良である。底部は糸切りで調整は不明である。063は復元口径7.3cmを測る。橙色を呈し胎土精良。調整は不明。糸切りと思われ、細かな板状圧痕がみられる。

やや上げ底である。064は砥石である。粒の粗い砂岩製で、破損している2ヶ所以外は全体を砥石として使用している。重量743.8gを測る。そのほかに陶器瓶小片が出土した。ガラスの壙塙として使用されており、外面の釉は残っておらず、内面にガラスが付着している。12世紀前後か。

2) 溝 約4本の溝を確認した。

SD002（第4図）調査区中央からやや南西寄りに位置する。主軸をN-76°-Wにとる東西方向の溝で西側に傾斜している。幅2~2.3m、深さ10~20cmを測る。中央部が浅く両岸が深くなるため2本の溝が並行している可能性もあり、北側をA、南側Bとする。ちなみに土層ではAとBの間に切り合い等は確認できなかった。調査区東端でBが南に折れ、Aは深さ5cmと浅くなる。等高線と無関係で東西に近いことから区画溝の可能性が高い。出土遺物（第13図 065・066）。065は土師碗である。摩滅の為調整は不明である。066は土師質甕小片である。表面には格子目のタタキが見られる。この他に青磁碗片、白磁片、滑石片、土師質片口鉢片や瓦片の可能性がある小片も出土している。出土遺物からSD002が埋まった時期は13世紀末から14世紀前半と考えられる。

SD003・014（第4図）調査区北東部から南西側に延び、少し南側に向きを変えた後SD002と交わる。幅40~75cm、深さ3~9cmを測る。SD002と時期差は不明である。1cm角の土器片が数点出土した。

SD054（第4図）SD003・014の約1m南側に平行する。幅20~30cm、深さ4cmを測る。現状では系統的であるが本来はつながっていた可能性がある。遺物は出土していない。

SD046（第4図）調査区東端の拡張部分で検出した。南北方向に延び緩やかな弧を描く。幅65~83cm、深さ9~18cmを測る。底面は北に向かって傾斜する。覆土は暗褐色土である。12世紀後半と考えられる。出土遺物（第13図067~069）。067は須恵器高台付坏である。近隣に8~9世紀の遺構があるものと思われる。068は青磁碗1~4b類である。口縁が輪花状をなす。釉は綠灰色で胎土は灰色を呈す。069は土師坏である。底部は回転糸切りで復元底径7.8cmを測る。

3) 柱穴状遺構 6次調査で確認した柱穴状遺構の多くは弥生時代の可能性が高く、出土遺物から確実に古代末～中世といえるのは008、020、024、032、033のみである。

3 小結

弥生時代の貯蔵穴1基と柱穴群、それに古代末～中世の溝4条と土坑2基を確認した。いずれも削半のため遺存状態は悪い。最も古い遺物は弥生時代中期の土器片がSK004などから出土しているが確実な遺構は確認できていない。後期中頃以降になるとSK004やSK040など確実な遺構が確認できる。SK004は下層から中層にかけて弥生時代中期の土器が出土するが、床面直上から出土した袋口縁壺（029）やレンズ状に膨らみかけた壺底部（038~041）から弥生時代後期中葉と思われ、貯蔵穴とすると時期的に新しい。SK004から出土した器台（042）は終末まで降るものと思われ、3次調査で確認した集落が台地上まで延びる。6次調査では確実に古墳時代に属する遺物はなく古代もSD046から出土した須恵器高台付坏の破片が出土したのみである。古代末～中世の溝と土坑はSD002が東西方向で調査区内ではほぼ直線なことから区画溝の可能性がある。北側に隣接する3次調査は幅約60mの谷の中に立地しており弥生時代終末～古墳時代前期中葉、6世紀後半～7世紀初頭、古代～中世前期の3期の遺構が集中するが貯蔵穴は出土しておらず、また古墳時代前期と6世紀後半で溝とまとまって掘立柱建物が出土しており、6次調査とは様相が異なる。古代～中世の時期になると掘立柱建物のみで溝は確認されていない。これらの違いは3次調査が谷の中、6次調査区が尾根上に位置するという立地の違いによるものと思われる。周辺の調査が進み集落全体の様相が確認されるのを期待したい。



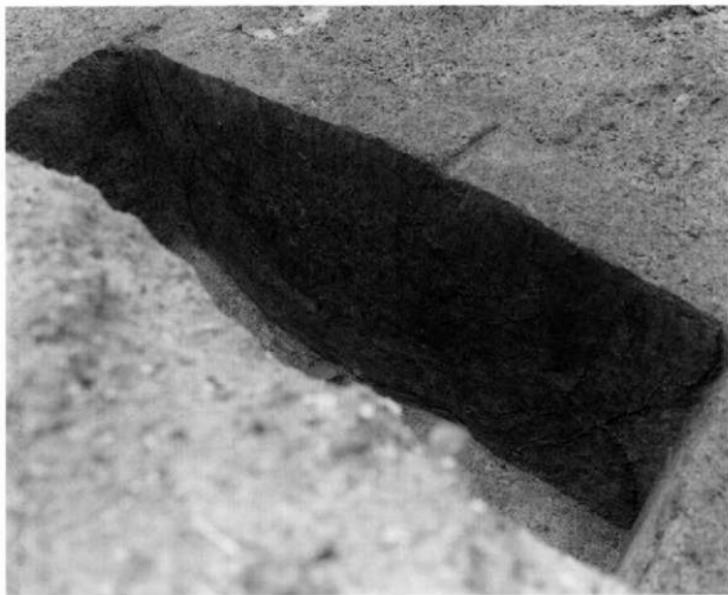
1. 調査区全景（南東から）



2. SK040（北西から）



1. SK004 (南東から)



2. SK 004 土層 (北西から)

図版 3



1. SD 046 (南から)



2. SK 034 (南から)

報告書抄録

書名 席田青木遺跡6
副書名 第6次調査報告
巻次 6
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号 933集
編集著者 屋山洋 編集機関 福岡市教育委員会 発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 2007年3月30日 郵便番号 810-8621
住所 福岡市中央区天神1丁目8番1号 電話番号 092-711-4667
所収遺跡名 席田青木遺跡第6次
ふくおかげんふくおかしづかたぐあおき
所在地 福岡県福岡市博多区青木1丁目438番、438番2
コード 市町村 40131 遺跡番号 020080
北緯 33°35'32" 東経 130°27'8"
調査期間 20050515~20050714 調査面積 19.7m²
調査原因 共同住宅の建設 種別 集落
主な時代と遺構・遺物
弥生後期-貯蔵穴(後期中頃~終末土器、中期土器、甕棺片)-柱穴(終末壺)
古代~中世 溝(白磁片、土師碗、土師皿、片口鉢)-土坑(白磁片、土師碗、土師皿)
特記事項 弥生後期貯蔵穴から鋳型の可能性がある土製品が出土した。

福岡市埋蔵文化財調査報告書933号

席田青木遺跡6

-第6次調査報告-

2007年(平成19年)3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社吉村綜合印刷
福岡市博多区博多駅前2丁目3-23



